

# 『少女世界』読者投稿文にみる「美文」の出現と「少女」規範

—吉屋信子『花物語』以前の文章表現をめぐって—

Historical Formation of the Figurative Style in the Reader's Column of "Shojo Sekai" and "Girl" Norm: Before Yoshiya Nobuko's "Hanamonogatari"

嵯峨景子\*

Keiko Saga

## 1. 問題の所在と視座

現在自明的なカテゴリーとして扱われることの多い「少女」という存在は、近代国家による教育システムをはじめとする諸制度の成立のなかで出現したものである。1899（明治32）年に公布された高等女学校令は一県に一校女学校の設立を定め、ここにおいて女子中等教育が確立された。女学生の増加、そして公教育の普及による読み書き能力の向上に伴う読書人口の増加は、少女雑誌の誕生を後押しする原動力となった。

1902（明治35）年、初めての少女雑誌『少女界』が金港堂より創刊されている。これを皮切りに、1906（明治39）年の『少女世界』（博文館）、1908（明治41）年の『少女の友』（実業之日本社）、さらには1912（明治45）年の『少女画報』（東京社）など、数多くの少女雑誌が創刊され、読者獲得に向けてしのぎを削った。

明治30年代以降に多数創刊された少女雑誌には、識者や教育家による論説や小説など、少女

のためのさまざまな読み物が掲載されていた。また読者である少女たちは、雑誌の読者欄をはじめとする投稿欄を通じてコミュニケーションやネットワークを発展させ、雑誌への帰属意識や仲間意識を形成していた。少女雑誌というメディアは「少女」という存在を可視化させ、独自の少女文化が花開いていく土壌となった。

少女そして少女文化との関わりにおいて、吉屋信子の『花物語』が大きな意義を持つことは、多くの論者によってすでに指摘されている。本田和子（1982=1992：187）は『花物語』を「わが国近代において、『少女』の誕生を告げる事件」と述べ、また二上洋一（1995：229）も「上質のセンチメンタリズムが結実した少女小説の一つの成果」と高く評価している。

大正から昭和期にかけて長く少女たちに愛され、読み続けられた『花物語』は、ミッション系の寄宿舎などを舞台に少女同士の友情や愛情を美しい文体で描いた連作短編小説である。感

\*東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：少女雑誌、少女規範、投稿、吉屋信子、花物語

傷的でロマンティックなストーリーにも増して『花物語』の最大の魅力と言われているのは、その物語を構成する独特の美文である<sup>1</sup>。しかしこの『花物語』の美しい文体は、吉屋信子が生み出したオリジナルのものではなく、当時の少女雑誌の投稿欄において用いられていた文体であることが近年指摘されている。中村哲也（1995）は『花物語』の美文を投稿する少女たちの一群と、彼女たちが投稿に用いた美文の系譜のなかに位置付けている。中村の指摘は『花物語』のテキストを捉える際に重要な示唆を与えるものである。しかし中村の分析は少女雑誌のなかの投稿文と『花物語』の美文の類似性を示すものに留まり、また編集者側の言説もわずかな選評が紹介されているだけである。

本稿は中村が指摘した論点、吉屋信子の『花物語』の美文は当時の少女雑誌において少女間で共有されていた文体であるという問題意識を引き継ぎつつ、中村の論考では触れられていない、美文の形成の歴史的なプロセスに焦点を当てて分析を行っていく。また投稿文を分析する際、少女たちの文章表現の変化に着目するばかりではなく、編集者による指導も取り上げて論じていく。投稿文が誌上に掲載されるためには

雑誌の作り手である編集者によって作品が選ばれる必要があり、少女の美文の形成過程において編集者の与えた影響は大きいものがあった。そのため、投稿文の変化とともに、編集者がどのような作文指導を行っていたのか、誌面における編集部の言説と掲載された読者の作文の双方の実証的な検討が求められる。編集者の指導とのせめぎ合いのなかで少女の美文体がどのように成立したのか、少女による美文の確立とその意義を近代日本における少女規範との関連において明らかにすることが本稿の課題である。

このように『花物語』の美文表現の源流を少女雑誌のなかで探るといふ問題意識のもと、具体的な作業として少女雑誌『少女世界』を取り上げ、誌上に掲載された投稿作文の分析を行っていく。『少女世界』については2章で詳述するが、明治期における代表的な少女雑誌の一つであり、また吉屋信子をはじめ、後年女性作家として活躍した書き手が少女時代に多数投稿をしていた雑誌であった。当時の少女雑誌のなかでは最も読者投稿を通じた女子の作文指導に熱心な性格を有しているため、この雑誌に焦点を当てて分析を進めていく。

## 2. 『少女世界』と『花物語』について

### 2.1 『少女世界』と読者投稿欄

本稿で取り上げる『少女世界』は、1906（明治39）年9月に博文館より創刊された少女雑誌である。1931（昭和6）年12月に廃刊となるまで、明治期に創刊された少女雑誌のなかでは長い発行期間を有し、少女たちに愛

読された雑誌であった。博文館には1901（明治34）年に創刊された『女学世界』という、『少女世界』より高い年齢層を設定した先行雑誌があり、『少女世界』はその妹雑誌的な位置付けである。しかし雑誌創刊のプロセスは、

『少女世界』が『女学世界』ではなく、1895（明治28）年1月に創刊された『少年世界』から分化したものであることを示している。1895（明治28）年9月、『少年世界』に「少女欄」が開設されている。少年雑誌のなかに誕生した「少女欄」は、やがて少女向けの雑誌『少女世界』となって独立した。

『少年世界』から派生した『少女世界』は、『少年世界』同様主筆を巖谷小波が務めている。雑誌の巻頭には巖谷小波による小説が掲載され、他には口絵写真や少女小説、読者参加型の投稿欄なども設けられていた。想定読者層は高等小学校から高等女学校の低学年頃の若い読者層で、平均的には13歳から15歳くらいまでの少女が多かったと思われる。

『少女世界』には「少女会館」という名の読者投稿欄が設けられており、その中身は「学芸室」「顧問室」「娯楽室」「談話室」と4つの部門にわかれている。「学芸室」は文芸投稿欄で、短文や短歌・俳句などが掲載されていた。本稿で分析を行うのはこの「学芸室」に掲載された短文である。「顧問室」は読者が編集者に宛てた質問に答えるコーナー、「娯楽室」はクイズが出される娯楽性の強いコンテンツとなっている。「談話室」は読者欄で、読者同士の交流や交際が行われる場として人気を集めた。

同時代の他の雑誌『少女界』や『少女の友』に比べ、『少女世界』は読者の文芸投稿とその指導に対して熱心な雑誌であった。『少女世界』における読者投稿とその指導の積極性は、編集者沼田笠峰がもたらした特徴である<sup>2</sup>。沼田は創刊時の『少女世界』には関わっておらず、創刊からおよそ半年後に編集部に加わり、

以後長く編集主幹を務めている。沼田は『少女世界』の編集者としての活動のかたわら「少女読書会」も主催するなど、実践的な少女の文芸指導を行っていた。少女時代に『少女世界』の投稿家として活躍した作家の吉屋信子や北川千代、森田たまは「少女読書会」の参加者であったことが知られている。沼田の文学と少女教育への理解の高さは『少女世界』の編集方針や投稿欄に反映され、『少女世界』は読者の文芸投稿に寛容かつ指導に熱心な性格を有していた。こうした雑誌の特性により、同誌は少女の美文表現の成立過程を考察するのに適した雑誌であると言える。

具体的な分析に入る前に、読者投稿欄が雑誌のなかでどのような位置付けであったのか、また読者にとっていかなる存在であったのかという点について確認を行う。誌面に掲載された言説から伺えるのは、投稿欄を少女の作文練習の場として設け、教育効果を期待する編集部の意向である。

文章や筆蹟を投書するのは、もとより名譽のためでもなければ、娯楽のためでもありますまい。つまり投書によつて、文章や筆蹟を練習しようといふのが、第一の目的でせう。もしそれが誌上に出ますれば、名譽でもあり楽しみにもなりますけれど、併し第一の目的は、練習のためでなければなりません。それならば、誌上に出る出ないに拘はらず、文章を作り、文字を書くことが、皆様に取つては非常な利益になつて居るのです。皆様は、誌上に掲載されないのを恨むよりも、作ることそれ自身に興味を

もつて、一回一回と上達するやうに心がけて頂きたいと思ひます。(下線部は筆者によるもの。以後も同様。)

これは『少女世界』1910(明治43)年9月の記事からの引用である。投稿は誌上に作品が掲載されるという名誉や娯楽のためではなく、あくまで作文の練習であることが強調されている。少女雑誌の投稿欄には多くの作品が集まり、選ばれて誌上に掲載されるのはごく一部であった。例えば『少女世界』1910(明治43)年9月号に掲載された沼田笠峰の「手帳の中より」という記事の中では「雑誌の紙数が少ないため、文章などは掲載し得るのが毎月僅かに八九十、全体の数から言えば八十分の一にも足らない位、即ち平均八十人について一人といふ割合にしかありません。」と記されている。高倍率の文芸室は、選ばれずに落選する投稿が圧倒的に多く、それゆえ仮に掲載されなくても文章を作ることに意義があることが繰り返し説かれている。しかし実態としては高い倍率であるからこそ、難関をくぐり抜けて誌上に作品が掲載されることは少女たちの大きな喜びとなり、また誇らしい気持ちにさせる榮譽ある出来事であった。読者たちは結果に一喜一憂をしつつ、自分の作品が掲載されることを夢みて雑誌への投稿を続けた。

## 2.2 『花物語』とその文体

『少女世界』の具体的な分析に入る前に、本稿がその前史として探る、吉屋信子の『花物語』とそのテキストについて検討を行う。吉屋信子(1896 - 1973)は大正・昭和を代表する

編集部は投稿はあくまで文章練習のためのものであることを説きつつも、作品や投稿者に序列を形成するなど、読者の榮譽心をくすぐる仕掛け作りを行っていた。誌上に掲載された短文には選者による「評」がつけられ、甲賞乙賞が授けられるなど、掲載作品には序列がつけられている。また優秀な投稿家は、口絵写真で誌上に登場することがしばしばあった。さらに1909(明治42)年1月より優秀な投稿家に贈呈される「梅檀賞」が設けられている。梅檀賞は毎月3名のみにも与えられた榮譽ある賞である。梅檀賞の受賞者は『少女世界』が開催する各種の会に優待員として参列することが可能であり、また『少女世界』の編集者に無紹介で面会を許されるなどの特権が与えられていた。この梅檀賞(少女メダル)は4年間の間に230名ほどが受賞しており、吉屋信子もその受賞者の一人である。梅檀賞は1912(大正元)年12月をもって廃止となったが、こうした賞の存在は読者の投稿熱を高める役割を果たしていた。

投稿欄は少女の文章鍛錬の場という理念、さらに雑誌への帰属意識や読者同士の繋がりを深めて愛読者として結集させる目的のもとで開設されており、少女たちは自己表現を行う場所として、また誌上に作品と名前が掲載されるという榮譽心を求めて投稿を行った。

女性作家の一人であり、少女小説『花物語』で人気を博し、以後は少女小説に留まらず大衆小説の世界にも進出して活躍をした。『花物語』は吉屋信子の出世作であり、また少女小説の金

字塔としてその名を知られている。

『花物語』はもともと依頼された原稿ではなく、吉屋信子が『少女画報』の編集部宛に投稿した作品であった。それが編集部の目に留まり、採用が決まるという経緯のもとで連載が始まっている。1916（大正5）年7月の『少女画報』に掲載された第一話「鈴蘭」は読者の評判を集め、結果的に『花物語』はおよそ9年にも及ぶ長期連載となった。『花物語』は1920（大正9）年2月に洛陽堂より単行本化され、以後も版元を変えて出版され続け、時代を超えて少女たちに長く愛読されている。

『花物語』は、それぞれ花の名を表題とした短編小説52編から構成された物語である。『花物語』のテキストの特徴を捉えたうえで、『花物語』以前の少女雑誌の読者投稿文における美文表現の分析を行っていく。

本田和子は『花物語』の文体について、「作品の表層を幾重にも覆う言葉のひだ飾り、これら過剰に見えるほどの言葉の装飾は、論理的な意味を越え、というより理論の介入する余地もない。そして、それらの装飾的な言葉たちが、表層を埋めてそれぞれにゆらめきわたるとき、作品世界には不思議の香気が立ちこめて、束の間の幻覚を出現させるのだ。」と述べている（本田 1982=1992：189-190）。

それは——月見草が淡黄の葩を顫はせて、かほそい愁を含んだあるかなきかの匂ひを仄かにうかばせた窓によつて佳き人の襟もとに匂ふブローチのやうに、夕筒がひとつ、うす紫の空に瞬いてゐる宵でしたの。（吉屋 1920：15-16）

上の一文にみられるように、幾重にも言葉を重ねた長い装飾的な連りの文体は『花物語』の特徴の一つである。

以下に紹介するのもまた、『花物語』に通底する感傷性やセンチメンタルなトーンが表れている一文である。

言葉を終りて物語りし人は指先をひそかに、たさぐれば薬指のあたりにこのあはれ深きローマンスの秘密をこめし指輪はおほろに冴えゆく暁の明星のやうに閃きました。仄かに儂げに——。（吉屋 1920：45-46）

「ローマンス」をはじめとするカタカナ書きの外来語、また引用した文章以外でも「あえかな」という単語や「…ものを」と明確な結語をもたずにほかした文末も頻出する。こうした表現を含め、過剰なまでに装飾的な美文が『花物語』を構成する文体であった。

本田は『花物語』の美文について、「こう見てくると、『花物語』を開花させたのは、特定の誰その影響というにもまして、多くの先達の耕した「美文」という沃土、それであったに相違いない。」（本田 1982=1992：195）と述べ、具体的な影響として泉鏡花や王朝文学、世紀末アールヌーヴォー等を指摘している。これらが吉屋信子に影響を与えたことは明白であるが、『花物語』の美文が少女雑誌の投稿欄において形成された美文体の系譜に位置付けられることを中村（1995）は指摘しており、本稿もこの視座から分析を行っていく。

吉屋信子が『少女世界』の投稿家であったこ

とは、『花物語』の文体の成立を考察するうえで示唆的である。吉屋信子は尋常小学校3年の時に創刊された『少女世界』を創刊号より愛読し、高等女学校に入学以後投稿をはじめた。吉屋信子の作品が初めて『少女世界』に掲載されたのは1910（明治43）年6月で、1911（明治44）年10月には梅檀賞を受賞している。「何しろ、その当時は、（記者先生）というものが、学校の先生よりも、もちろん遥かに傑いま

るで文学の神様のように思えたのでございましょう。」（吉屋 1936=1976：409）と回想にもある通り、少女時代の吉屋信子は当時の典型的な文学少女のパターンとして少女雑誌への投稿に熱中していた。吉屋信子が『少女世界』の熱心な投稿家であり、投稿を通じて投稿少女の文体や規範を身につけていたことは、『花物語』の文体が成立した背景として見過ごせない事実である。

### 3. 『少女世界』投稿作文の文体の変遷

#### 3.1 文語体から言文一致体へ

本章では『少女世界』の読者投稿作文、またその作文を選ぶ側である編集部による言説の双方に焦点を当てつつ、少女の美文表現の成立とその背景の検討を行っていく。

『少女世界』創刊翌月の1906（明治39）年10月の学芸室は6頁で、26通の短文が掲載されている。短文は「一篇の長さ二十四字詰二十行以内」との指定がなされている。

乙賞に選ばれたのは、渡井さく子の「秋の趣」という作品である。

桐の一葉に秋立ちてよりまがきに残る朝顔もいとゞ小さくなり果てつ。木々の梢はやをら黄ばみそめあはれふかくぞなりにけるさはれ物悲しきのみにはあらで趣深きも秋にこそさやけく登る明月の金龍波に踊らせて夕べの美観そふるも秋なれば金鈴ならす如き虫の声々を月下に打ち開くも秋ならでやは、春は桜其他はではでしき花をめでぬれど秋の野山のゆかしきにはいかで及ば

ん。尾花が霞は天然の実玉とや見ん野菊のしほらしきもいとゞ風情ありげにゆかしきは秋の野べ。お、今よ歌人のあこがる、秋は来にけるなり<sup>3</sup>。

この短文は文語体で記されている。『少女世界』成立初期の短文に用いられていた文体は文語体であり、また選評もなく誌上には作品のみが掲載されていた。

1907（明治40）年の途中から選評がつけられるようになるが、これは沼田笠峰が『少女世界』に関わりだしたことによる変化だと推測される。投稿規定も「二十四字詰十行以内」と改訂がなされ、これが以後の定型となった。1907（明治40）年8月の学芸室は10頁で短文掲載数は51通、『少女世界』1908（明治41）年8月の学芸室は15頁で短文掲載数は60通と、ページ数・掲載短文体ともに増加し、学芸室は読者の投稿で賑わった。

1908（明治41）年8月号で甲賞を受賞した

のは、萩原秋子の「秋ぐさ」という作品である。「千草や八千代草乱れ咲く秋の野辺こそ興多きものなれ。芙蓉は秋の花王とも云ふべきか。(中略)なべて秋草は、春草のやうに艶ならず、夏草のごと淡ならず、云ふなき寂しさあるこそ憐れにも可愛きものなれ。」と、やはり文語体が用いられている。選評には「(前略)シツカリした文体が気に入りましたから、これを甲賞と致します。」と記されている。

1909(明治42)年5月の学芸室は16頁で、掲載投書数は69通、甲賞を受賞したのは志田登代子の「逝く春の雨」という作品である。ここで、採用される作品の特徴が変化する。

糸の様な細い雨は、今日も尚小止みなく降り頻つて居ります。気もうつたうしう、文読む事にも倦みて、一人縁の柱に寄り掛つて、緑深い庭打ち眺めてをりますと、枝

### 3.2 「少女らしさ」という規範と美文の登場

文語体から言文一致体へと文体の変化が生じた頃、『少女世界』誌上には少女の作文に対する記事が頻繁に掲載されるようになっていく。作文指導における言説を分析し、編集部の方針及びその方針を成立せしめた社会的背景への考察を行っていく。

『少女世界』の1908(明治41)年1月増刊号『少女と立志』には、「少女は何処までも愛らしく、やさしく、従順でなければなりません。その愛らしさ、そのやさしさ、その従順なる美德が、実に少女の世界の根本となるのです。」(1908.1:40)と記されている。こうした記事をはじめ、誌面においてあるべき少女

折戸越えて、翼をぬらした可愛い胡蝶が、力なく飛んで参りました。可哀さうに蝶の宿なる荳蒲公英は、皆此の雨に色あせて、見る影もございません。あゝ蝶は昔の酔さめて、何処をか迷つて来たのでありませう。折柄、庭に怪しの音と見れば、青葉隠れの青梅が、風もないのにもろくもまろび落ちたので御座いました。おゝ運の拙い梅は、こゝにも一つ彼方にも……何となく淋しい、身を引締められる様な夕で御座います。

採用された作品は言文一致の口語体を用いて書かれている。短文をみていくと、1909(明治42)年頃から文語体よりも言文一致体が主流となっていったことがわかる。文体の最初の変化として、文語体から言文一致体へとという転換が生じていた。

像、およびその少女像に基づいた実践的な作文方法が繰り返し提示されていくようになる。これは沼田笠峰をはじめとする編集者たちが想定する「少女らしさ」という規範の鋳型でもある。

久米依子は『少年世界』および『少女世界』に掲載された少女小説や言説記事を分析し、あるべき少女像の変化を指摘している。明治20年代後半にみられたのは、家父長制や良妻賢母主義のもと、あくまで「家の娘」としての規範に制約され、抑制されている少女の姿である。こうした少女像はやがて、明治40年代に入り、沼田によって「愛される少女」へと転

化が行われた。沼田は他者から「愛される」ことを重視し、そのために「愛らしく」「少女らしく」振る舞うよう奨励した。また「外からも愛らしく見える」ことが少女の条件となり、リボンをつけて身を飾ることをはじめ、外観を美しく装うことが説かれるようになる。このように、明治40年代において「愛される少女」という新たなあるべき少女像と規範が形成された。(久米 1997、2003)。

「愛される愛らしい少女」という新しい規範や少女像が誕生したことを久米は論じているが、本稿はこうした少女像や規範が『少女世界』という雑誌のなかで少女作文の指導と強く結びつき、実践されていた事実を指摘したい。「愛らしい少女」という規範のもと、「少女らしい」作文を作ることが読者に求められるようになり、それを説く作文指導の記事が多数誌面に掲載されるようになった。

『少女世界』1909(明治42)年5月には、沼田の署名による「記者より」という記事が掲載されている。

投書家諸嬢に一言申し上げたいのは、少女は何処までもやさしい文章を書くのがよい、といふことです。皆さんの柔らかな皮膚のやうに、ふさふさとした黒髪のやうに、涼しい眼もとのやうに、ハツ口をこぼれる美しい振りのやうに、しほらしい素直な心を本にして、情のあふれた優しい文章を書いて下さい。真心から出た少女の文章は、どうしても優しくなければならぬのです。(沼田 1909.5:108)

このように少女は外見的にも素直な美しさや愛らしさを持つものとみなされており、またそれにふさわしい「優しい文章」を書くことが奨励されている。美しさや優しさは少女の外観に留まらず、文章や文体にも求められるようになった。

1908(明治41)年4月15日、『少女世界』の増刊号『少女と文藝』が刊行された。この増刊号は文芸及び作文のノウハウや実例に特化した内容となっており、編集部の作文指導の方向性が強く打ち出された一冊といえる。ここでは『少女と文藝』に掲載された「美文の作り方」という記事を取り上げ、少女の作文に対して編集部がどのようなスタンスを取っていたのかを確認する。

文章を正しく美しく書かうとするには、よほど注意して、美しい辞句を選ばねばなりません。殊に少女の文章は、出来るだけ優美な辞句を用ひて、スラスラと書き綴らねばなりません。(1908.4.15:72-73)

前にもしばしば申し上げたことですが、少女の文体は、ちやうど愛らしい少女の心と同じやうに、やさしく美しいのが宜しからうと思ひます。女でありながら、男子とまがふばかりに雄々しい文章を作つたり、角立つた文字を書いたりするお方もありますが、それでは女子に特有のやさしさが偲ばれませんから、決してよいことではあるまいと私は思ひます。どうぞ皆さんは、飽くまでも少女のしとやかさ、美しさを文章の上にもあらはして、優にやさしい日本少



女の特色を發揮して下さい。(1908.4.15 : 79)

こうした記事は、「愛らしい少女」という規範のもと、文体にも少女らしい優しさや優美さを求め、美しい字句や流麗な文体を用いるよう指導していたことを示している。

編集部が「美しい文章」を盛んに奨励するなか、1910(明治43)年から1911(明治44)年頃より作文の文体に変化があらわれている。以下の引用は『少女世界』1911(明治44)年11月の甲賞受賞作、吉岡得代の「新しい望」である。

その夜！結びもつれた絹糸のやうな美しい夢から覚めて、宵に読み残した絵物語を繰り返しました。口絵の乙女は、分髪に髪に花束をつけて、常夏の宮を逍遥つたのでせう。今覚めた子は、低く低くハーモニカを吹き終へて故知らず微笑みました。と、うなだれた紅いダリーヤがホロリと。おゝ花！！お前は弱い子ねえ。幼い人の様な花よ。何故散るの？私が。強い子が、今思つてゐる新しい望みが満みて、赤いリボンを付けた時のやうに嬉しい心になるまで、咲いてゐて頂戴よ。星と花の外に誰も知らない夜の心！！

[評] 読んで柔らかな感じのする文章で

す。絵物語と散る花と少女の心と一美しいものばかり。甲賞としてメダルを呈す。

この作文において顕著であるが、編集部の指導を受けて、感嘆符の多用、ロマンティックで感傷的なイメージの表出などが際立つ、叙情性の高い表現が目立つようになっている。叙情性・感傷性の高い文体を用いた短文は1910(明治43)年、1911(明治44)年頃にその数が急増しており、この時期に少女の美文表現が読者間に広まっていったことを示している。

このように少女の美文の誕生のプロセスをみると、少女たちが独自の感性に基づいて生み出した表現というよりも、「愛される少女」という規範や少女像が形成され、少女が用いる文体にも外見同様美しさや優しさなどの美的な要素が求められ、美文体を用いるよう奨励されたことが誕生の大きな要因となっていることが伺える。少女文化の特徴の一つとみなされるロマンティックな文体や表現様式の成立において、少女観の転換や男性編集者の関与・指導が大きな影響を及ぼしている点は重要である。そうした状況のなかで、少女たちは求められた規範や様式を内面化し、主体的に文体や表現の優美性・装飾性を高めていき、独自の美文表現を発展させていった。明治末期の少女雑誌の投稿欄において誕生した少女の美文体は読者間で共有され、積極的に用いられるようになっていった。

## 4. 美文の普及と編集部による「思想」の指導

### 4.1 「思想」の強調へ——編集部の指導方針の転換

前章では、明治末期の『少女世界』投稿欄において叙情的でロマンティックな美文が登場

し、少女間に広まりその文体が投稿文のスタンダードとなる過程をみてきた。こうした美文体が少女間に普及をみせるとともに、それまで少女らしい優美な文体を推奨していた編集部の記事の論調に、変化が生じている。1912（明治45）年7月、「少女の文章」という記事の中で、「この頃の少女の文章は、一体に色彩に富んだ、あでやかな書き方が流行するやうです。」と前置きしたうえで、以下のように述べられている。

申すまでもなく、文章は思想を発表するために作るのです。思想が本で、文辞の裝飾や調子の善悪は第二の問題であります。

（中略）然るに、この頃の少女の文章の中には、大切な思想よりも、外にあらはれた辞句ばかりを飾り立てやうとするものがあります。甚だしいのになりますと、切れぎれの美文妙句ばかりを書き列ねて、少しも文意の通じていないものさへあります。

（1912.7：100）

ここでは文章における「思想」の重要性が説かれ、外側だけを飾り立てた近年の少女の文体に対する苦言が呈されている。

記事では引き続き、少女の文体の問題点について具体的な指摘を行っている。例えば少女の美文の定番のフレーズであった「ロマンス」という表現も「或る文章に、『ロマンスな秋』といふことがありました。これはロマンスといふ名詞を形容詞として使つたので、たしかに間違ひであります。ロマンスといふ意味の形容詞は、ローマンチックとしなければな

りません。」（1912.7：101）と文法的な誤りとみなされている。また「フレンド」や「レター」などのカタカナ表記に対しても「これ等はわざわざ英語を使はなくても、日本語の方が解りやすくもありますし、感じも穏やかだと思ひます。」（1912.7：101）と述べ、上記の表現は「わざとらしい英語」として警鐘が鳴らされている。

さらに「誇張した感情」、例えば都の華やかさを想像したもの、友達と別れた悲しさの追想、少女時代が過ぎ行くのを惜しむ感傷なども否定されている。

少女時代には感情が鋭敏にはたらかまずから、その文章が感情的になるのは無理もありませんけど、あんまり感情に走つた文章は内容が貧弱で、読んだ後は何の印象も残りません。堅実な思想を発表するには、やはり堅実な文体でなければなりません。情緒本意の文章が悪いといふのではありませんけど、新時代の新取の少女は、過去に執着して悲哀の涙を流すよりも将来の希望には、まねばならないのですから、その文章もまた快活な、堅実なもの、方がよからうと思ひます。（1912.7：102）

ここで悪しきものとされている表現は、従来少女の美文の特徴と捉えられている表現やモチーフである。その表現が否定され、堅実な文章を書くことが勧められるという、指導の転換が生じている。それまで推奨されていた「少女らしい」美しい文体という論調は後退し、今度は逆に文章における堅実さや思想の重要性が強

調されるようになった。

1912（大正元）年10月5日、『少女世界』の増刊号『少女文話』が発売されている。これは以前に刊行された増刊『少女と文藝』同様、少女の文芸や作文をテーマにした増刊である。『少女と文藝』では少女の美文を奨励する記事が掲載されていたが、それに対し『少女文話』の中で繰り返し主張されているのは、文章における思想と内容の重要性である。

現代の少女の文章は、美しいことは美しいけれど、辞句を飾ることが主になつて、内容の貧弱なものが多いと言われます。これは要するに思想が豊かでないからでせう。（中略）もとより外形の美しいのも望ましいことです。美貌も美服も、少女として欲しいと思ふのは当然のことです。けれども、たゞ表面を飾り立てたものに、果たして永遠の価値があるでせうか。（中略）それよりも気高い人格、しつかりとした思

#### 4.2 少女雑誌を超えた「美文」の広がり

過剰化をみせる少女の文体に対し、編集部はそうした装飾性を諫めて堅実な文体を用いるよう指導を行ったが、美文は少女間に広まっていった。以下は『少女世界』1913（大正2）年1月に乙賞として掲載された渡邊艶子「逝く年の夜」という短文であるが、感傷的な題材や「ものを——」という言い回しなど、非常に「花物語的な」文体と言える。

サラサラと微かな草の葉ずれにまでホロリと落つる露の音の読める静かな夜、夜具

想がなければなりません。文章もこれと同じことで、内容の充実したものが一番よいのであります。（1912.10：66）

この一節が如実に示すように、編集部の指導方針に明らかな転換が生じている。以前は「愛される少女」という規範に基づき美しい文章を書くことが積極的に奨励されていた。その方針が原動力となり、少女の美文が登場し、読者間に普及していった。少女たちは求められた「愛らしさ」という規範を受け入れて内面化しつつ、装飾的なレトリックやセンチメンタリズムを過剰化させ、独自の美文表現を確立していく。こうした少女の美文表現が投稿文の主流となると、その文体の過剰さや表層性が危ぶまれ、編集者はそれを抑制する言説を唱えるようになる。作文の指導方針が、表面を飾り立てた文章を咎め、作文に堅実な文体や思想の豊富さを求める方向へと変化をみせた。

の襟の黒天鷲絨に頬を埋めて眠られぬ夜を明かしました。逝く年の儂さを思ひながら、やがて楽しい初春の喜びに美しく微笑む人を、ベッドの中より垣間見た時、孤独と云つたような侘しさを感じました。ホープに満つべき少女の心、悲哀に溺れたくは御座いませんけれど、恐ろしい病魔に捉はれた身体、少女の誇も御座いませぬ。衰へゆく身を忘れて、私の身を案じて下さるお母様を思へば、早く癒えたいと焦るばかり。病み疲れた私の瞳の底にも、希望の輝

は御座いませうものを——。

明治末期に成立した少女の美文は、大正期に入り、少女雑誌に留まらず、女学生や他雑誌へと広がり、用いられるようになった。川村邦光（1993）は『女学世界』の読者欄を対象とした分析を行い、「ハート」「ライフ」「ロマンス」などのカタカナ語の使用や叙情的な文体、またその文体を用いて描き出されているロマンティックな表象に着目し、『女学世界』読者欄内に「オトメ共同体」が成立していると論じた<sup>4</sup>。『女学世界』は少女雑誌よりは高い読者層が設定されており、また分析対象が投稿作文ではなく読者欄であるという違いはあるものの、少女雑誌内で誕生した叙情性・感傷性の強い美文表現は、その文体や気質を身につけた読者の成長とともに、さらに高い年齢層を有する雑誌へと広まっていったことがここからも伺える。

「愛される少女」という規範のもとで美文体を用いるようになった少女たちは、その要素を過剰化させて独自の表現として発展させていき、その文体は『少女世界』という一雑誌内に留まらずに広まり、共有され、大正期以降の少女文化や女学生文化の感性を形成する柱の一つとなった。少女の美文表現が一般化するにつれ、その過剰さを危ぶみ、今度は逆に装飾的な文章を戒めて文章に「思想」を求める指導が行

## 5. まとめと展望

本稿では、明治末期の『少女世界』の投稿欄に掲載された短文と、誌面に掲載されている編

われたことは先に述べたとおりである。しかし一度形成された美文体は雑誌という媒体を通じて普及し、大正期以降少女文化と結びつきつつ発展を遂げていった。

ここまでの分析で論じてきた美文の形成や叙情的な感性について、改めて『花物語』との関連において考察を試みたい。本田和子（1982=1992）は『花物語』における文章表現やレトリックを少女たちの閉じられた小宇宙のなかで生み出されたものと見なし、少女的な感性と結びつけて論じている。それに対し、本稿は『花物語』の文体は明治末期の少女雑誌のなかで少女たちが用いていた投稿文を源流としており、またその美文は少女規範に基づく男性編集者による指導とのせめぎ合いのなかで誕生したものであったことを指摘した。もちろん『花物語』の文体は少女雑誌の投稿文と同一のスタイルではない。より装飾的な言葉が多用されたテキストであり、そこに作家としての吉屋信子の個性や独自性を見いだすことができる。しかし『花物語』の根底をなす美文や叙情性、また従来少女的な情緒や感覚と捉えられていた感性を、社会性の欠落や少女文化における自閉性の表出のみに還元するのではなく、その文体や感性が近代国家や少女規範との関わりのなかで生み出されたものであること、極めて社会性を有した背景のもとで出現している点を見逃してはならない<sup>5</sup>。

集者の言説を照応させつつ、いかに少女の美文表現が形成されたのかというプロセスの検討を

行ってきた。以下において考察をまとめ、その意義を確認する。

本稿の分析により、少女の文章の特徴とされてきた装飾的な美文体は、「愛される少女」という近代日本において誕生した少女規範に基づいた編集者による指導、愛らしい少女にふさわしい美しい文体の推奨が契機となり、明治末期の少女雑誌の投稿欄のなかで形成されたものであったことが明らかとなった。投稿に用いられた美文は少女たちが独自に生み出した表現ではなく、その誕生のプロセスにおいて男性編集者が大きな役割を果たしていた。少女文化の特質の一つとみられる美文体や叙情的な感性は、従来は少女や少女文化における自閉性を示すものとして捉えられているが、その誕生の契機をみると、国家や社会との緊密な関わりの中で生み出されたものであった。『花物語』を構成する文体や感性もまた、少女たちの閉じられた小

宇宙の表出という側面のみには収斂させず、その感性を生み出した社会的背景や少女規範との関係において再考されるべきである。

少女による表現のなかでも際立った特徴の一つである美文について、それが生成されていくさま、そして一雑誌内に留まらずに広まり、発展していく姿の一端を描き出せたことが本稿の意義であり、明治末期から大正期にかけての少女文化や雑誌における女性表現に関する研究に寄与するものである。

本稿は明治末期の少女雑誌における投稿作文を中心とした分析を行ったが、ここで誕生した文体や感性が大正期以降、どのような発展をみせて少女文化や女学生文化として結実したのか、少女雑誌という媒体のなかでどのような少女表現やアイデンティティー形成が行われていたのかを、今後の課題としていきたい。

## 註

- 1 『花物語』は長期連載作品のため、文体や物語世界は途中で変化を遂げている。その変容を取り扱った研究に横川（2001）や高橋（2007）などがある。
- 2 沼田笠峰と『少女世界』については永井（1995）に詳しい。
- 3 引用に際し旧字は常用漢字に改め、また一部句読点を補ったものがある。
- 4 嵯峨（2011）は川村の分析に対し、「オトメ共同体」は『女学世界』に恒常的に存在したのではなく、1916（大正5）年前後に出現したものであり、この時期を境に文体に変化が生じ、ロマンティックな感性を共有した読者共同体が成立したことを指摘している。
- 5 渡部（2007）は少女文化における自閉性を少女が自足的に育んだものと解釈すべきではなく、国家や社会との関連から考察すべきだと述べている。この観点に関しては、本稿も渡部と問題意識を同じくする。

## 参考文献

- 本田和子（1982=1992）『異文化としての子ども』ちくま書房  
川村邦光（1993）『オトメの祈り 近代女性イメージの誕生』青土社  
久米依子（1997）「少女小説 一差異と規範の言説装置一」小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー 明治三十年代の文化研究』小沢書店  
———（2003）「構成される『少女』—明治期『少女小説』のジャンル形成」『日本近代文学』第68集  
中村哲也（1995）「＜少女小説＞を読む ——吉屋信子『花物語』と＜少女美文＞の水脈」日本児童文学会編『研究＝日本の児童文

学3 日本児童文学史を問い直す——表現史の視点から』東京書籍

嵯峨景子 (2011) 「『女学世界』にみる読者共同体の成立過程とその変容——大正期における「ロマンティック」な共同体の生成と衰退を中心に」『マス・コミュニケーション研究』78号

高橋成美 (2007) 「夢の主体化——吉屋信子『花物語』初期作の〈抒情〉を再考する」『日本文学』2007.2

二上洋一 (1995) 「大衆児童文学の新しい風」日本児童文学会編『研究=日本の児童文学3 日本児童文学史を問い直す——表現史の視点から』東京書籍

永井紀代子 (1995) 「誕生・少女たちの解放区——『少女世界』と「少女読書会」——奥田暁子編『女と男の時空V』藤原書店

横川寿美子 (2001) 「吉屋信子『花物語』の変容過程をさぐる——少女たちの共同体をめぐって——」『美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要』Vol.46

渡部周子 (2007) 『〈少女〉像の誕生 近代日本における「少女」規範の形成』新泉社

吉屋信子 (1920) 『花物語 第一集』洛陽堂

—— (1936=1976) 「投書時代」『吉屋信子全集 第十二巻』朝日新聞社

嵯峨 景子 (さが けいこ)

1979年12月7日生まれ

[最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府修士課程修了

[専攻領域] 歴史社会学、文化史研究

[著書・論文]

「『女学世界』にみる読者共同体の成立過程とその変容——大正期における「ロマンティック」な共同体の生成と衰退を中心に——」『マス・コミュニケーション研究』78号

「明治・大正の女性雑誌の面白さ」『望星』2011.1 (東海教育研究所)

「『女学世界』における投書の研究」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』77号

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程

[所属学会] 日本マス・コミュニケーション学会、日本社会学会、関東社会学会

# Historical Formation of the Figurative Style in the Reader's Column of "Shojo Sekai" and "Girl" Norm: Before Yoshiya Nobuko's "Hanamonogatari"

Keiko Saga\*

## Abstract

Most specialists thought that "Hanamonogatari", a novel written by Yoshiya Nobuko, was of the great significance in Japanese girl's culture in the Meiji and Taisho eras. "Hanamonogatari" was written in a figurative style, and that fascinated many girls in those days. Some preceding researches have pointed out that the figurative style had already been used in common by readers of girl's magazines by the time "Hanamonogatari" was published. But, it is still unclear when the style was created. The focus of this paper is when and how the figurative style was formed in the girl's magazine "Shojo Sekai".

I analyzed the reader's contribution to the publication of "Shojo Sekai", that was one of the most famous girl's magazine in the Meiji and Taisho eras. This survey showed the figurative style of writing in the magazine first appeared in around 1910 and 1911. Also, the instruction by the male editors of the magazine played an important role in the creation of this style. In the Meiji 40's [1907-1912], the new norm for girl's life style appeared in modern Japan. Instead of the conventional norm based on patriarchal system and Ryosai Kenbo [good wife, wise mother], girls were encouraged to adopt the life style of "Pretty Girl".

Male editors of the magazine promoted the norm "Pretty Girl", and encouraged to use beautiful and graceful style for writing. Thus, a romantic and sentimental expression appeared among girls, and became common. They went beyond the ordinary style, and created their original decorative style of writing. This romantic and sentimental expression became popular among girls through the magazine.

Editors who felt crisis in such a situation, warned readers of their figurative style for writing. However, their attempts were not successful. The figurative style had been an important code to create girl's community. It was a feature of girl's sensibility. A romantic, sentimental motif and

---

\*Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

Key Words : Girl's magazine, Girl Norm, Correspondence, Yoshiya Nobuko, Hanamonogatari.

expression spread among girls, and it became the base of girl's culture and schoolgirl's culture in Taisho era.